

卷 頭 言

— 科 學 と 宗 教 —

田 中 清 治*



北歐神話によると古代スカンディナヴィヤ人は火焰、霜、時化などを悪魔族としておそれ、また火を初めて見たラドロネス群島の蠻人は火は觸れると鋭く噛みつき、乾いた木材を餌食とする悪魔かまたは神であると考えた。また夏の暑熱や太陽など親和的な自然力を神族となし、神々は上天なる神苑に住み、悪魔どもは暗い混沌の僻遠の地を本據とし、これ等兩族はこの宇宙の支配権をめぐつて年中血みどろの争闘を続けているものとした。古代人は感覺的自然現象をば極めて素朴な驚嘆すべき神聖な宗教としてその前に恭しく平伏したのであつた。

懷疑は人間の宿命である。懷疑するが故に知識を生じ知識は更に懷疑に導く、かようにして科學の世界は段々に廣がつた。前世紀から今世紀にかけての科學の進歩は實に加速度的である。人間は科學の進歩に眩惑し、その力を過信し、科學によつて自然を征服し得るが如く思い上り宗教の世界はいよいよ遠ざかつた。然し人間は人間に止る限りその知識には限度があり宇宙の無限大の前には無に等しい。人間の經驗は宇宙の永遠無窮に比すれば一瞬間に過ぎない。また人間の知識は人間の感覺を通しての知識である。一悠然と山を眺める蛙かな—という句があるが人間には蛙の世界はわからない。所詮神の前には無知である。

ナポレオンが星光燦爛たるエジプトの夜空を仰いで「誰が一體これ等を皆造つたのか」と學者モンジュに訊ねたという（フィルテ—幸福論）これこそ人間の最も本質的な疑問であらう。而して如何なる科學も哲學も何等解答を與えることが出来ない。これこそ永劫の疑問であらう。吾々は謙虛の心で萬象を觀るならば何一つとして驚異でないものはないであらう。朝顔の一粒の種の中に、蔓と葉を生じ、美しい花が咲き實を結ぶ、あの生命の躍動は何處にひそんでいるのであらう。使命を果した蔓草はやがて安らかに土に歸つて次代の根を培う肥料となる。この種からまた生命の躍動が始まる。かようにして朝顔の生命は永遠に續いて行く。何を目指して、何のために。それは人間には永劫の謎であらう。

物質の根原を原子としてその構造から物質を研究し、また原子核の研究から原子力時代が出現した。この科學の成果は誠に輝かしい。而して原子なるものは電子が光の速さにも近い大なる速さで原子核のまわりのあの極微の空間を回轉しているというのである。ナポレオンがエジプトの夜空を仰いで訊ねたあの疑問は此處にも存在するではないか。科學は皆かような靈妙不可思議な基礎の上に築かれているのである。

不老不死の藥を得て永遠の若さを娛む、これこそ最も人間的な素朴にして本質的な慾望である。秦の始皇帝が徐福をつかわして東海に不老不死の藥を求めしめた。彼は童男童女各三千人美々しく飾つた船に永遠の若さの希望を乗せて山東省登州府から出帆したが彼は永遠に歸つて來なかつた。人間は死を免れない宿命を擔つている。この鐵則の前には哲學も科學も何の權威もない。人間は皆宗教の中にその解決を求めた。所詮人間は自然法に支配されて生きている。自ら生きるのではない。光と熱と空氣と水と食物を與えられて生かされているのだ。この大いなるものの意志が欲しなかつたなら人間という存在はなかつたのだ。道元禪師が永平寺のあの山中の水の豊かな處でも一滴の水をも粗末にしなかつたというあの心境、良寛和尚の「死ぬ時は死んだ方がよろしく候」というあの隨順と何の屈托もない心境は、こうした受身に感ずる心からはじめて理解されるのである。*前會長、東大名譽教授、工博